

周山2号墳発掘調査報告書

2023年

龍谷大学文学部考古学実習室

例 言

- 1 本報告は、京都市右京区京北下町折谷地内（京都市立京北小中学校内）に所在する周山2号墳の発掘調査報告に関するものである。
- 2 調査は、龍谷大学文学部考古学実習室・考古学研究室が学術調査として実施した。
- 3 調査期間は、2022年8月17日（水）～8月28日（日）である。調査面積は9m²である。
- 4 周山古墳群は、過去2次の調査が行われており、今次調査は周山古墳群第3次調査に当たる。
第1次調査：1974年、同志社大学考古学研究室（森浩一主担当）による1号墳の墳丘部を対象とする発掘調査。
第2次調査：2012～2013年、龍谷大学考古学実習室による1～4号墳の現況測量（平板測量）調査。
第3次調査（今次）：2022年度、龍谷大学考古学実習室による2号墳の形態、規模等確認の発掘調査。
- 5 調査は、國下多美樹（龍谷大学文学部教授）、木許守（同教授）が担当し、下記の学生の主たる調査援助を得た。
ドローン撮影は、杉山洋（同教授）に拠る。
調査補助：花熊祐基（博士課程3回生）、前田詞子（修士課程2回生）
調査参加者：
廣澤公紀、和田一希（以上、文化遺産学専攻3回生）
池浦里咲 石橋初音 伊藤鴻司 稲垣杏奈 植木悠矢 浦天音 片岡亜希 金井セピアアイシャエルフィアン
川崎凜 岸本悠馬 北岡正充 鎌田健太郎 小谷彩翔 小林永都 笹山和寛 竹中彬子 立花一佳 伊丹稀星
浅沼興希 谷田朱里 出口新 萩田雅己 堀川楓華 政川綾音 増田寛之 松井調 松尾野々花 南陸斗
宮崎なな 村崎結愛 山口千穂 吉田将司 和田茉薫 永田裕希（以上、文化遺産学専攻2回生）
浅沼興希（日本語日本文学2回生）
- 6 調査に係る事務は、文学部教務課が担当した。
- 7 整理作業は、龍谷大学考古学実習室で行った。調査図面の整理作業は、花熊祐基、前田詞子、出土遺物の実測、トレース作業は、池浦里咲が担当した。
- 8 本冊の執筆は、調査、整理担当者が行い、分担は下記の通りである。
花熊祐基：5調査の成果〔1〕第2-1東トレンチ
前田詞子：5調査の成果〔2〕第2-1西トレンチ
池浦里咲：5調査の成果〔3〕出土遺物
廣澤公紀：1-〔2〕歴史的環境
國下多美樹：1-〔1〕地理的環境、2調査に至る経緯、3調査の目的と方法、4既往の調査 6まとめ
- 9 調査に際しては、下記の機関、方々のご協力を得た。記して感謝申し上げる。
京都市教育委員会教育環境整備室、京都市立京都京北小中学校、京都市右京区京北出張所、
京北の文化財を守る会、ナベの会、あうる京北
馬瀬智光、黒須亜希子、熊井亮介（以上、京都市文化財保護課）、河内一浩（安西工業）、尼子奈美枝、太田宏明、
金澤雄太、永井正浩、渡邊邦雄（以上、ナベの会）、神所尚揮（加西市教育委員会）、
小泉裕司（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、高橋秀延（京都京北小中学校）、
石井敏雄、水谷寿克（以上、京北の文化財を守る会）
- 10 本書の編集は、國下多美樹、木許守が担当した。

目次

例言

| | | |
|---|-----------------|----|
| 1 | 位置と環境 | 1 |
| | 〔1〕 地理的環境 | |
| | 〔2〕 歴史的環境 | |
| 2 | 調査に至る経緯 | 5 |
| | 〔1〕 概要 | |
| | 〔2〕 全体計画 | |
| | 〔3〕 2022年度の調査過程 | |
| 3 | 調査の目的と方法 | 8 |
| 4 | 既往の調査 | 9 |
| | 〔1〕 古墳群の構成 | |
| | 〔2〕 1号墳の調査 | |
| | 〔3〕 2～4号墳の調査 | |
| 5 | 調査の成果 | 12 |
| | 〔1〕 2-1東トレンチ | |
| | 〔2〕 2-1西トレンチ | |
| | 〔3〕 出土遺物 | |
| 6 | まとめ | 15 |

抄録

奥付

図版目次

| | | |
|-----|--|----|
| 図版1 | (1) 周山1～4号墳の現状(中央の杉木立、ドローン撮影、南西から) | 17 |
| | (2) 周山2号墳調査前風景(草刈り後、東側の1号墳墳丘から) | |
| 図版2 | 周山2号墳、2-1東トレンチ全景(2層上面、フェンス奥が1号墳、西から) | 18 |
| 図版3 | (1) 周山2号墳、2-1東トレンチ全景(2層上面、北西から) | 19 |
| | (2) 周山2号墳、2-1東トレンチ全景(南端試掘後、西から) | |
| 図版4 | (1) 周山2号墳、2-1東トレンチ全景(南端試掘後、東から、 試掘孔奥：墳丘側の葺石、手前は石敷き) | 20 |
| 図版5 | (1) 周山2号墳、2-1号墳試掘断面(北から、墳丘側) | 21 |
| | (2) 周山2号墳、2-1東トレンチ全景(南端試掘後、西から) | |
| 図版6 | 周山2号墳、2-1西トレンチ全景(西から) | 22 |
| 図版7 | (1) 周山2号墳、2-1西トレンチ全景(2層上面、西から) | 23 |
| | (2) 周山2号墳、2-1西トレンチ全景(最終面、直上、ドローン撮影) | |
| 図版8 | (1) 周山2号墳、2-1西トレンチ西端2c層中の礫群(南西から) | 24 |
| | (2) 出土遺物 | |

押図目次

| | | |
|-----|-------------------------------|----|
| 図1 | 周山古墳群の位置 | 1 |
| 図2 | 京都市右京区京北町の遺跡分布図 | 2 |
| 図3 | 調査開始時の地元の方々へのご挨拶 | 6 |
| 図4 | テント設営風景(東から) | 7 |
| 図5 | 2号墳の草刈り状況(北東から) | 7 |
| 図6 | 2-1東トレンチ発掘風景(東から) | 7 |
| 図7 | 地元説明会風景(南西から) | 8 |
| 図8 | 2022年度トレンチ配置図 | 10 |
| 図9 | 周山1号墳の現状(西から) | 11 |
| 図10 | 周山3・4号墳の現状(南東から) | 11 |
| 図11 | 2-1東トレンチ断面図(S=1/40) | 13 |
| 図12 | 2-1東トレンチ平面図(S=1/40) | 13 |
| 図13 | 2-1西トレンチ断面図(S=1/40) | 14 |
| 図14 | 2-1西トレンチ平面図(S=1/50) | 15 |
| 図15 | 遺物実測図(S=1/4) | 16 |

表目次

| | | |
|----|------------------------|---|
| 表1 | 周山古墳群の規模等一覧表 | 9 |
|----|------------------------|---|

抄録

1 位置と環境

〔1〕 地理的環境

周山2号墳は、京都市右京区京北下町折谷地内に所在する。京都市内から古墳のある周山地域までは車で約1時間30分ほどである。2021年暮れに、京北トンネルが開通するまでは、京都市内から国道162号線を使って険しい山間を通る道しかなかったから2時間以上かかった。

京都市内から古墳への道程は、天神川を遡り、そのまま国道162号線として山間いの谷をすり抜けると、もう丹波山地に入り込む山道となる。笠トンネルを抜けて、最後の周山トンネルを潜る。道路は左手の眼下に桂川を見ながら併走するようになる。さらに北進すると、桂川が北と北東に分岐する周山地点となる。北からの流れは弓削川、北東からの流れは上桂川と別称される。この2河川が形成した狭隘な盆地が周山盆地である。周山盆地の地形分析によると、2河川の合流する京北町周山地域は、中央に高位段丘面、両河川に接して低位段丘面と沖積面が発達する（中塚2021）。

南から古墳群のある段丘面を見ると、中央の高位段丘面が馬の背状に高く、現在、京都市立京都京北小中学校がおかれている。京北小中学校の西側脇道を上がって行くと、周山古墳群のある小さな杉木立ちとなる。周辺は学校建設時に山林が開かれ、緑は、古墳群付近とさらに北方に広がる程度になった。古墳群の北側の露頭では強風化礫層が分布しており、地形条件をみることができる。

周山古墳群は、この段丘の尾根上に位置し、周山盆地で最も眺望の開けた地に造営された古墳群である。

（國下）

〔2〕 歴史的環境

京北地域は93%が山地という山間部にあり、この盆地内に大堰川（桂川）と弓削川が流れ、河川周囲の段丘や丘陵において135箇所遺跡が発見されている。

京北地域では、1955（昭和30）年に京北町烏谷の北桑田高等学校付近から磨製石斧が、1967年に旧京北町宇津小学校で凹基無茎式石鏃が出土しており、縄文～弥生時代での活動がみられる（京北町1975）。さらに土器や須恵器の破片なども出土しており、以降も古代人が集落を形成し、現代まで連綿と歴史が刻まれてきたことが知られる。

縄文時代では弓削川沿いを中心に遺物散布地の発見があるが、明確な遺構は見つかっていない。遺跡として狭間谷遺跡（25）、五本松遺跡（32）、東山遺跡（39）、栃木遺跡などがみられる。東山遺跡は縄文～中世にかけて営まれていた集落遺跡で、古墳時代の竪穴住居跡や須恵器、韓式土器などが出土している。古墳時代に栄えた集落だったことが出土遺物などから考えられている。また、愛宕山古墳群の調査では、出土品に縄文土器とサヌカイト片も見られた。

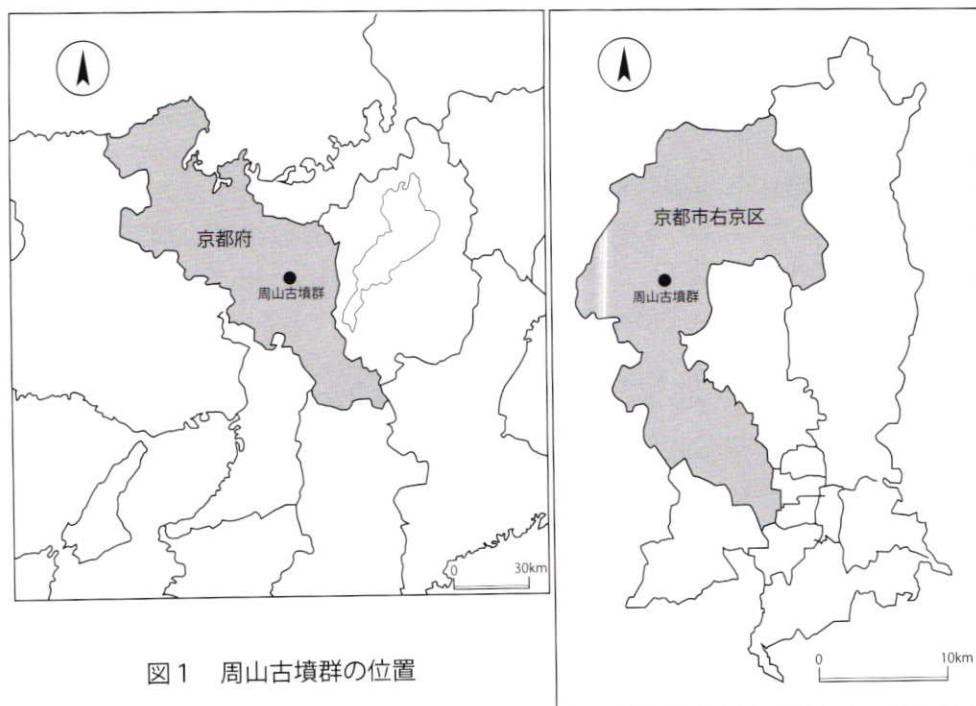


図1 周山古墳群の位置



- 1 九門屋敷跡 2 鳥谷古墳群 3 ふくがなる古墳群 4 宮の谷古墳群 5 上中古墳群 6 筒江夏路古墳群 7 弾正古墳群
 8 八幡宮裏山古墳群 9 岩々鼻古墳群 10 筒江遺跡・古墳群 11 中道寺跡 12 上中太田遺跡 13 上中城跡 14 上中遺跡
 15 下弓削遺跡 16 矢谷遺跡・古墳群 17 矢谷奥古墳群 18 塩田古墳群 19 矢谷奥遺跡 20 塩田口古墳群 21 永林寺跡
 22 福徳寺跡 23 下弓削銅鐸出土地 24 狭間谷古墳群 25 狭間谷遺跡 26 しが谷古墳群 27 井崎遺跡 28 井崎寺跡
 29 大年窠跡 30 出口古墳群 31 五本松西遺跡 32 五本松遺跡 33 奥堂遺跡 34 卯滝谷遺跡 35 大年古墳群 36 周山城跡
 37 八津良城跡 38 周山瓦窠跡 39 東山遺跡 40 高梨遺跡 41 周山古墳群 42 周山廃寺跡 43 祇園谷遺跡 44 折谷古墳群
 45 殿橋遺跡 46 折谷東古墳群 47 下町遺跡 48 鳥居八幡遺跡 49 鳥居古墳群 50 塔遺跡 51 塔城 52 塔村古墳群
 53 三宅谷古墳群 54 愛宕山古墳群 55 院谷遺跡 56 比賀江古墳群 57 院谷古墳群 58 中江古墳群 59 中江城
 60 最玄寺経塚 61 六々遺跡 62 大野古墳群 63 長池古墳群 64 常照皇寺経塚 65 霊願寺跡

図2 京都市右京区京北町の遺跡分布図（京都市遺跡地図提供システムを参考に作成）

弥生時代では上中太田遺跡(12)、塔遺跡(50)、卯滝谷遺跡(34)、院谷遺跡(55)などの集落遺跡が発見されている。水稻耕作を営んでいたと考えられる遺構などもあり、縄文時代よりも遺跡数が増加した。塔遺跡では土器溜り、卯滝谷遺跡では磨製石斧や石包丁、上中遺跡(14)では土壙墓群などが出土しているが、注目すべきは江戸時代に下弓削の山中から出土した扁平鈕式四区架梁濼文の銅鐸(23)である。南丹波地域では唯一の銅鐸であり、大堰川上流で発見されたことから河川によって日本海側から弥生文化がもたらされたとも考えることができ、当地の歴史を知るにあたって欠くことができない文化財である(國下2021)。

古墳時代になると多くの古墳が築造され、京北地域では約230基の古墳が発見されており(熊井2022)、京都府では亀岡市に次ぐ多さである。しかし、これらの古墳はほとんど調査されておらず内容が判明しているものは5%にも満たない(註1)。前期古墳は前期末～中期初頭の愛宕山古墳群(54)から認めることができる。愛宕山古墳は割竹形木棺を擁する方墳であり、出土品に仿製鏡3面や玉類、鉄剣などがあることから初期の首長墓と考えられている(京北町1983)。中期古墳としては今回調査を行った周山古墳群(41)がある。後期古墳としては、京北地域で最大の群集墳数を誇る中江古墳群(58)、円墳で無袖式横穴式石室を持ち、稲荷を祀る塔村古

墳(52)や無袖式横穴式石室を持ち、渡来系遺物である三足壺が出土した鳥谷古墳群(2)など京北町一帯には横穴式石室が主体となる多くの古墳群が形成された。一方で、古墳時代は京北地域一体を墳墓が占め、集落はあまり見られない。

今回調査を行った周山古墳群は11基の古墳で構成されている。京北町と同志社大学により1号墳の調査が行われており、方形墳であることや葺石・円筒埴輪片などが発見され、測量が行われている(森1974)。その他、調査としては龍谷大学による周山古墳群測量(國下・熊井2014)がある。周山1号墳と愛宕山古墳は首長墓であるが、その背景には京北地域が近世の丹波・山城・近江・若狭への交通の要所として機能したように、古墳時代も地域間の交流を背景に栄え、有力者が首長墓を築造するに至ったとみられている(永江2003、熊井2022)。また、周山1号墳で見られた方形墳は出雲地域で多く見られるもので、出雲族が京北地域に入って暮らしていたという考えもある(註2)。

飛鳥から奈良時代にかけて古墳築造から寺院建築へと移り変わる。京北地域には今回調査を行った周山中学校(現京都市立周山小中学校)の敷地内に周山廃寺(42)があった。白鳳文化が京北地域に根付いていた証である。この周山廃寺は1947年に行われた石田茂作による調査を端として現在に至るまで何度も調査が行われている(石田・三宅1959、京都市埋文2019)。1947年の調査では南門址・東堂址・塔址・中堂址・北堂址・西堂址が狭い範囲に配置された特異な伽藍配置であることが明白になり、大和川原寺式系譜をひく軒瓦などが出土した。中央政権との関係性も考えられている。

1978年には廃寺の南西900m地点で周山廃寺の瓦を焼成していた周山瓦窯址(38)が発見された(京大考古研究室1982)。最近行われた2018年の調査では、失われたとみられていた西堂が地中に埋もれ残っていたことが明らかとなり、礎石6基の再確認と建物周囲に排水溝が確認されている。さらに、大量の白鳳期の廃棄瓦が出土し、周山廃寺は7世紀創建の地方寺院として多くの建物址が見られる数少ない地方寺院であり、この時期の在り方を知る手がかりとなる貴重な遺跡であることが明確になった。また、古代の京北地域の開発は、秦氏や秦氏の傍系者が関わっていたと考えられており、行基・弓削道鏡らが創建したと伝承が伝わる福德寺跡(22)や弥生～鎌倉時代まで機能していた上中遺跡(14)、飛鳥～平安時代までの集落遺跡である高梨遺跡(40)、奈良時代の集落遺跡として祇園谷遺跡(43)なども見られる。

平安時代になると、京北地域は弓削川流域に弓削荘、大堰川流域に山国荘が形成され、長岡・平安京造営の木材を供給する地(杣)となり発展する。当初、山国荘は修理職領であったが、後に中世～明治時代まで天皇の禁裏御料地として支配され、皇室との深い関係が構築された(註3)。また、材木を筏輸送するために「御材木御間」という問丸組織が成立し、活躍していく(藤田1994)。また塔遺跡では緑釉陶器が出土しており、山国荘の存在意義を物語る。また、京北地域では神仏習合の影響を受けており、山国神社内にあった神宮寺や弓削八幡神社内にあった神宮寺(中道寺)(11)などが挙げられる。平安時代末になると経塚が築造される(註4)。主な経塚として高梨経塚、周山経塚、毘沙門谷経塚などがあり、調査した周山経塚・毘沙門谷経塚からは茶碗や直刀などが出土した。

京北地域には京へ物を運ぶ商人のルートとして周山街道がある。京都から若狭へ抜ける古代からのルートであり、戦国時代～江戸時代にかけて主に鯖を運ぶルートだったため西の鯖街道ともいわれている。京北地域は古代から日本海沿岸部と近畿地方を結ぶ交通の要所地であり、この立地が京北地域の発展へと繋がった。

中世の遺跡としては上中城跡(13)がある。平安時代末～中世の城館であり、京北町により2回調査が行われている。土塁は掻き揚げ土塁であること、箱堀状の堀で囲まれていたこと、古墳時代からこの地が居住地として利用されていたことが明らかになった。また、最近の調査としては龍谷大学が2014年から4年間かけて行った成果がある。上中城以前の土地利用、城館跡の規模や構造を再確認、上中城存立年代の手がかりとなる遺物も出土している。

南北朝時代には光厳天皇が出家して晩年過ごしたとされる常照皇寺がある。現在、常照皇寺裏山に光厳天皇山国陵が祀られている。

中世の京北地域(戦国時代)は宇津氏の支配下となる。始めは禁裏の権力掌握を目指す、やがて強大な力を持つと山国庄領主としての野望を抱くようになる。織田信長が戦国大名として台頭してくると、宇津氏による年貢横領や荘園略奪などの横暴に対して停止要求を行うが宇津氏は信長を軽視した。結局、信長は宇津頼重の居城であった宇津獄山城を明智光秀に攻めさせ、あっけなく敗北することとなる(註5)。これにより宇津氏の勢力圏は全て光秀のものとなり、光秀は新たに上桂川と弓削川合流地に周山城跡(36)を築く(註6)。この時、網野村から周山村に地名が改変されたが、城の完成をみることなく、光秀死亡により築造途中で光秀方残党によって焼け落ちた。現在、周山城跡

は織豊系城郭中でも特筆される城であり、2本の堀切を挟み東と西に城を構える大規模な縄張りを持つ(福島2008、中居・高橋2013、京都市2021・2022)。2016年に現地踏査・測量などが行われた。規模は東西約1.3km、南北約0.7kmに及ぶことが明らかになった。さらに2017年には航空レーザー測量で「赤色立体地図」が作成され、新たな遺構が確認された。2020年には現状記録としてオルソ測量、保護のために石垣崩落対策が行われた。

近世末では、幕末期に農兵隊として戊辰戦争を戦った山国隊が京北地域で結成され、戦死者が山国護国神社に祀られている。

(廣澤公紀)

註

- (1) 熊井2022報告に拠る。
- (2) 『京北町誌』1975 pp.21
- (3) 岡野友彦2009「修理職領から禁裏領へ」『禁裏領山国荘』pp.24に拠ると、中世時は修理職領のままであり、修理職の官司そのものが天皇に直属化したことで禁裏領になったという説もある(桜井1987)。
- (4) 『京北町誌』1975 pp.49に拠ると、源義家が京北宇津の切畑にて安部貞任七つ裂きにして埋めたが、怨霊の祟りをおそれ分神を祀り怨霊を鎮めたという伝承がある。
- (5) 『京都府の歴史散歩』上 pp.268に拠ると、『信長公記』に宇津城は一戦も交えず落城との記載がある。
- (6) 『京都府の歴史散歩』上 pp.268に拠ると、周山城は宇津城を大改修した城との記載がある。

引用文献

- 石尾政信「高梨遺跡第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第106冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003年
- 石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」『考古学雑誌』45-2 日本考古学会 1959年
- 馬瀬智光「周山城跡—明智光秀が築いた山城—」『リーフレット京都』No.374(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2020年
- 岡野友彦「修理職領から禁裏領へ」『禁裏領山国荘』高志書院 2009年
- 奥村清一郎「愛宕山古墳発掘調査概要」『京都府京北町埋蔵文化財調査報告書』第2集 京北町教育委員会 1983年
- 加納敬二「京北の遺跡」『リーフレット京都』No.204(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2005年
- 京都市文化市民局『京都市内遺跡分布調査報告 平成17年度』2006年
- 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課「周山城跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告』京都市文化市民局 2018年
- 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課「周山城跡」『京都市遺跡発掘調査報告』京都市文化市民局 2020年
- 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課「周山城跡」『京都市遺跡発掘調査報告』京都市文化市民局 2021年
- (財)京都市埋蔵文化財研究所『周山廃寺発掘調査現地説明会資料』2018年
- (財)京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018-6 周山廃寺』2019年
- 京都大学文学部考古学研究室『丹波周山窯址』真陽社 1982年
- (財)京都府文化財保護基金『古墳・埋蔵文化財』1972年
- 京都府歴史遺産研究会「周山街道から京北一周」『京都府の歴史散歩』上巻 山川出版社 2011年
- 國下多美樹・熊井亮介「2012年度周山古墳群測量調査報告」『龍谷大学考古学実習』9号 龍谷大学考古学実習室 2014年
- 國下多美樹・熊井亮介「2013年度周山古墳群測量調査報告」『龍谷大学考古学実習』10号 龍谷大学考古学実習室
- 熊井亮介「京北町の古墳～周山古墳群を中心に～」『龍谷大学考古学談話会資料』2022年
- 京北町誌編纂委員会『京北町誌』京北町 1975年
- 小池寛「祇園谷遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第52冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993年
- 小池寛「塔遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第64冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995年
- 桜井英治「三つの修理職—非宮司請負制的体系と天皇支配—」『遙かなる中世』8号 1987年
- 平良泰久・久保哲正・奥村清一郎「周山盆地の遺跡」『日本の古代遺跡 京都I』27巻 保育社 1986年
- 辻川哲郎「丹波・周山1号墳出土埴輪について」『同志社大学歴史資料館 館報』第16号 2013年
- 中居和志・高橋成計「347 周山城跡」『京都府中世城館跡調査報告書—丹波編—』第2冊 京都府教育委員会 2013年
- 中川和哉「東山遺跡」『京都府埋蔵文化財情報』第74号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999年
- 中川和哉「東山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第92冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年

中川和哉「東山遺跡第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第99冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001年
野島永「上中遺跡第6次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第52冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993年
福井県教育委員会「丹後街道Ⅱ・周山街道」『福井県歴史の道調査報告書』第3集 2003年
福島克彦「丹波周山城について」『城館史科学』5号 城館史科学会 2008年
藤田彰典「京都大堰川の運上木制度と筏数」『社会科学』53号 同志社大学人文科学研究科 1994年
森浩一「周山1号古墳」『日本考古学年報』27号 日本考古学協会 1974年
龍谷大学文学部考古学実習室「上中城跡の研究」『龍谷大学文学部考古学実習調査報告書』第1冊 2021年

2 調査に至る経緯

〔1〕概要

龍谷大学文学部考古学実習室では、考古学研究室と協力して2012年度(平成24)から京都市右京区の埋蔵文化財を対象に、フィールド調査を進めてきた。具体的には、京都市右京区京北下町の周山古墳群の測量調査、上中城跡の測量調査、発掘調査、嵯峨野地域の踏査と大覚寺4号墳の墳丘測量、発掘調査である。その成果は、毎年度末に実習報告書『龍谷大学考古学実習』で公表しつつ、一定の成果をまとめた調査報告書『上中城跡の研究』(『龍谷大学文学部考古学実習調査報告書第1冊、2021年)として公開している。

本報告に収載した周山2号墳を含む周山古墳群は、2012年度に京北町で初めて取り組んだ調査であった。京都市右京区京北町域をフィールドとして設定したのは、かつて岡崎晋明先生(本学名誉教授)、杉本宏先生(現、京都芸術大学)による研究対象として、この地が選ばれたことがあり、学問的には京都の北西、丹波地域東部に位置し、平安京との関係や山陰、近江各地との水陸の交通が見られることなど、当地が原始・古代の京都を考える上で重要な地域であるという理由からであった。しかし、調べて見ると、当地の考古学的情報は極めて限られており、考古学的遺跡の基礎資料の収集が不可欠な状況であった。

そこで、京都市文化財保護課と調整を重ねた上で、考古学実習の主担当であった國下が当時修士1回生であった熊井亮介(現京都市文化財保護課)、学部2回生の浅田洋輔(現宇治市教育委員会)と共に、旧京北町教育委員会の文化財担当者であった人魯亨氏に協力を求め、現地確認を行った。現地の環境的な条件も含めて、実地の調査が可能で学術的意義も大きい周山古墳群を対象に行うことになった。

周山古墳群の測量調査から着手した。測量調査は、1号墳と3号墳、及び北側の高まりを対象として、2022年8月5日から10日の期間で行い、縮尺1/50で25cm間隔の等高線を図化する平板測量を行った。調査終了後、熊井が京北町総合庁舎に保管されていた周山廃寺の資料調査を行い、調査成果に生かした。

その結果、周山1号墳は、南北約20m、東西約17mのやや南北に長い方墳と推定され、葺石を伴うこと、北側に高まりをもつこと、墳頂平坦面で歴史時代の須恵器片、南西の崖付近で6世紀前半(MT15~TK10型式)の須恵器を採取し、南東側に東北東-西南西向きの群状遺構を確認し、周山廃寺同範の軒丸瓦を採取するなど重要な成果をおさめた(『龍谷大学考古学実習』No.9、2013年)。

ところで、周山古墳群は、1974年と翌年に同志社大学考古学研究室が発掘調査を行っている(日本考古学協会1976年)。同大学による調査成果は、森浩一氏を主担当として1号墳の西裾から2号墳との境に調査区を設けて実施されたものであった。両墳の境は溝状となっており、葺石が連続していたことが明らかになっていた。

そこで、龍谷大学では、2013年8月5日から8日、及び8月21日から9月1日までの16日間を要して、校内に現存する古墳群全体の測量調査を行い周辺の情報収集も行った。測量調査は、前年度の成果を生かして、西側の2号墳、北西側の4号墳を対象を広げ、概ね、杉木立ちとして残る範囲の全域を資料化することができた。

2013年3月7日・18日には、同志社大学歴史資料館が所蔵・保管している周山1号墳の埴輪の資料調査を行った。その結果、1号墳から円筒埴輪6点、蓋形埴輪5点他、破片が出土しており、4世紀後葉の年代であることが明らかになった(花熊2014)。

2013年10月、同志社大学考古学研究室の行った周山1号墳の調査資料が辻川哲朗氏によって公表された(辻川2013)。1974年当時の調査関連の資料を提示され調査状況と成果を整理されたもので、できうる限りの情報提供が

なされた。

京都市遺跡地図台帳に登録された内容は、周山中学校（当時、現京都市立京都周山小中学校）の北側には、かつて11基からなる古墳群が存在していたことが知られたが、その位置については『京都府遺跡地図』、『京北町遺跡地図』、『京都市遺跡地図台帳』で混乱が見られた。そこで、國下と熊井が測量期間中に周辺の踏査を行い、現状確認を行ったところ、1～4号墳と7～11号墳が現存し、2～5号墳は現存する可能性を指摘するに留まる、5・6号墳はグラウンド造成によって地表面に痕跡をとどめないことが明確になった。

以上の経緯を踏まえて、周山古墳群の発掘調査を行って古墳に直接関わる基礎資料の入手が急務と考え発掘調査を計画したのである。

〔2〕 全体計画

発掘調査

2022年度：周山2号墳の範囲確認調査。現地説明会等による成果の公表

2023～2025年度：周山3号墳・4号墳の範囲確認調査。及び1号墳北側の高まり、南東側の土塁状以降の調査必要に応じて追加の調査を実施。

整理・報告書作成

毎年度の調査成果の概要は、『考古学実習発掘調査概要報告』として年度内に刊行。

2026年度に調査の総括報告書を刊行する。

〔3〕 2022年度の調査過程

以上の計画について、京都市文化財保護課と調整を図り、2022年（令和4）6月7日付で龍谷大学が発掘調査の届出を行った。そして、2022年7月26日付で埋蔵文化財の発掘調査についての通知（4教第5号の17）を得ている。

調査は、予備日を含めて、8月17日から9月2日までの約2週間を期間として計画し開始したが、調査の状況から8月28日に終了した。

以下、調査過程を略述する。

調査日誌抄

8月17日（水）・18日（木）：雨で中止する。

8月19日（金）：本日より本格的な調査開始。機材搬入。テント設営。京都市立京北小中学校、京都市京北出張所に挨拶。2号墳の草刈り作業。

8月20日（土）：2号墳の草刈り終了し、調査前風景の写真撮影。2号墳の墳裾推定位置を現地に表示して、古墳中軸線を設定する。まず、東西トレンチを設定。東西16.5m、南北1.0m。面積16.5m²。墳丘上の杉の根株を避けて中央で食違いトレンチとする。

午後より、トレンチの掘り下げ開始。表土は、現代の腐植土層。根が多く難航する。墳丘東のトレンチを2-1東トレンチ、西のトレンチを2-1西トレンチと命名する。

8月21日（日）：2-1トレンチの表土（第1層）掘り下げ作業。2-1西トレンチでは、第1層直下に締りのある褐色系砂質土が現れ、東に向かって傾斜すると判明。2-1東トレンチでは、第1層直下で褐色土が現れる。第1層から近世瓦出土。測量作業を行う。

8月22日（月）：2-1東トレンチでは、墳丘側は表土除去後、盛土系土が現れる。5cm程度の薄層で拳大の礫を伴う。想定した墳裾付近の流土から人頭大の礫が出始める。礫を含む



図3 調査開始時の地元の方々へのご挨拶

地層の基質は1層系土。現代以前の里道に伴うものか。東に拡張して1号墳との関係を検討する。

2-1西トレンチでは、1層系土を完全に掘り上げたのち現れた黄色系土上面で精査する。地山を確認するために、西端で試掘する。墳丘斜面の形成土は、盛土系の土層。さらに東端を拡張し掘り下げると、褐色シルトとなる。水準移動作業。

8月23日(火)：2-1東トレンチは、頭部を拡げて1層を掘り下げる。礫の検出。

2-1西トレンチは、西部の掘り下げと断面精査。やや締りのある褐色系粘質シルトないし礫質シルトの分布は盛土の可能性。平面図、断面図用の測量杭設定。

水谷氏、馬瀬氏、黒須氏来現。

8月24日(水)：2-1東トレンチは、トレンチ南端で試掘をして下層の状態を確認する。墳丘側は、1層を除去すると盛土系土、裾部は濁灰色系粘質シルト(近現代か)、さらに黄褐色粘土を除去すると平坦面を上に向け配列したかのように見える石敷きを検出。

2-1西トレンチは、北側を東西向きに試掘する。深さ20cmまで。上面で検出した盛土層が連続する様相。西端で墳裾を認定。河内氏来現。

8月25日(木)：2-1東トレンチ試掘作業。第1層以深の成果を受けて、基本層序は、近世から近代と想定する灰色系シルトを第2層、2号墳の墳丘盛土層を第3層、基盤を第4層とする。

2-1西トレンチ西部を試掘して墳裾を探す。2層系土を掘り下げると拳大の礫が散布し始める。

8月26日(金)：2-1東トレンチは、試掘を礫群検出段階で止めて全景写真撮影および三次元測量。断面図作成。

2-1西トレンチ西端で検出していた礫群が転落石状になったので除去し墳裾を検出する。全景撮影。

午後1時より地元説明会開催。16名の参加。

8月27日(土)：杉山洋先生によるドローン撮影。

2-1東トレンチは試掘をさらに掘り下げて断面図を作成。全景撮影。2-1西トレンチは、全景写真撮影。

尼子氏、太田氏、金澤氏、永井氏、渡邊氏、熊井氏、小泉氏、神所氏来現。

8月28日(日)：埋め戻し作業。機材撤収。本日で調査終了。

(國下多美樹)

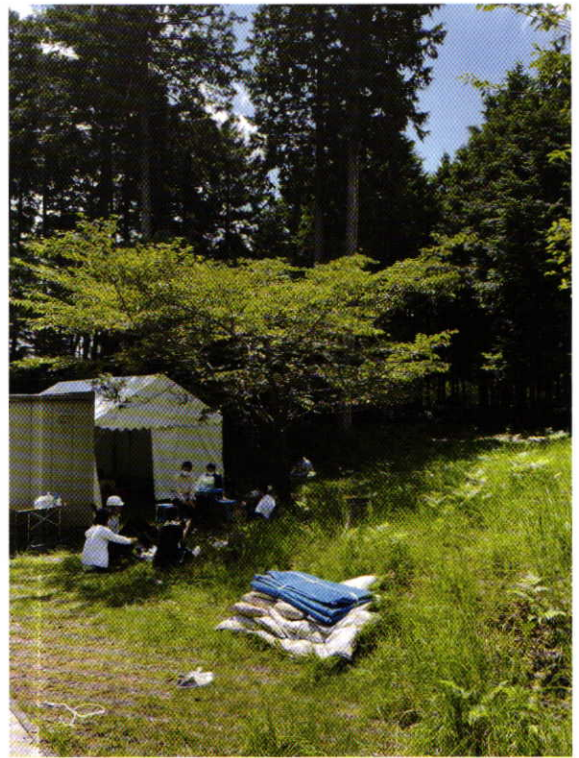


図4 テント設営風景



図5 2号墳の草刈り状況(北東から)



図6 2-1東トレンチ発掘風景(東から)

3 調査の目的と方法

2022年度は、周山2号墳を次の諸点を明らかにする目的で、範囲確認の調査を実施した。

- ① 墳形、規模の確認
- ② 葺石、埴輪等の外表施設の有無の確認
- ③ 埋葬施設の残存状況の確認
- ④ 築造時期に関わる資料の入手

まず、①の点である。周山2号墳は、本学による測量調査の結果、5基の方墳で構成されると推定できたが、あくまで地表面の観察の結果であるから、墳形や規模の推定については正確性を伴うものではなかった。今回の対象とした2号墳の現況は、北・東・南辺は比較的明瞭に下端を認定できたが、西端は墳丘が流出した状況で明確に決めることは難しい状況であった。

②の点は、1号墳の外表施設が葺石、埴輪を伴うことが明らかになっているなかで、隣接する2号墳についての情報が一切無い現状である。少なくとも地表面にはほとんど葺石サイズの礫の散布が無いし、埴輪等の遺物も採集されていない。また、2号墳の東端は、1号墳と接しているために、1号墳の葺石がどのように2号墳に広がっているのかについての情報が不可欠であった。1号墳の西裾の調査で確認されていた礫敷遺構の性格を解明することも課題となる。

③の点は、埋葬施設がどの程度遺存しているかの基本情報を得ることを目的とする。現状は、中央部が大きく凹んでおり、主体部の遺存状況を確認することになる。

④の点は、2号墳の年代に関わる土器、埴輪などの直接資料を入手することである。古墳主軸の方位性からすれば、1号墳の年代に近いものと推測することが妥当であろうが、考古資料など年代判定の資料を入手できれば、古墳群の形成過程を復元する資料となり得る。

以上の目的を達成するために、調査は、2号墳の中軸線上にトレンチを設定して行うことにした。トレンチは、幅1.5m、長さ18mの長方形を十字形に交差して計画した。しかし、現地において古墳の想定中軸線を割り出し設定したところ、杉の木などの樹木で位置をずらさざるを得なかった。また、トレンチの掘り下げ作業に手間取り、当初の計画を東西トレンチのみで、面積も最小限度に変更して墳裾の確認を先行させる方針に変更した。

結果、今次調査で設定した2号墳の調査トレンチは、古墳の南北中軸上の1トレンチ（2-1トレンチと呼称）のみとして、主体部付近の中央部は調査しないで、2号墳の東裾付近のトレンチ（2-1東トレンチ）、同墳の西裾付近のトレンチ（2-1西トレンチ）とした。2-1東トレンチは、南北1m、東西3.5m、面積3.5㎡、2-2トレンチは、南北1m、東西6m、面積6㎡であり、総面積9.5㎡となった。

今次調査では、2013年度調査時に前面舗装道路に設けたVI系国土座標点RP9、及び敷地北東に設置した基準ポイントを利用して、新たに2点（RP50・51）を設置した。

以下、関連する測量成果を記す。

RP 9 X = - 93281.069
Y = - 33211.658
H = 277.412m
RP14 X = - 93317.129
Y = - 33220.027
RP50 X = - 93306.294
Y = - 33225.322
H = 278.515m
RP51 X = - 93299.587
Y = - 33234.118
H = 276.853m

(國下多美樹)



図7 現地説明会風景

4 既往の調査

〔1〕古墳群の構成

周山古墳群は、現在、京都市遺跡地図に1～9号墳の9基が現存しているものとして登録され、周知されている。古墳群は、丘陵の尾根ないし東斜面の南北450m、東西100～150mの範囲に分布している。その分布は、古墳群南端の標高276.4m前後に、今次対象とした2号墳を含む1～4号墳、北西端の標高294.4m付近に5号墳、北東端の標高291.3m前後の東斜面上に6～9号墳がある。古墳群の中央部付近はグラウンドになっており、大きく削平されている。

かつては、11基の古墳群があった。1986年に埋蔵文化財包蔵地として最初に周知された『京都府遺跡地図』では、11基の方墳が半壊または完存していた(表1)。現在では地表面に残らない4・5号墳は、グラウンド造成時か以前に削平されたものと推測され、2007年の『京都市遺跡地図台帳第8版』では、2基が所在不明とされている。

1～4号墳については、2012年から2013年にかけて、龍谷大学考古学実習室・考古学研究室が25cmコンターによる測量図を作成して公表した(龍谷大学2013・2014)。

〔2〕1号墳の調査

周山古墳群の最初の発掘調査は、1974年の同志社大学考古学研究室(森浩一氏主担)による1号墳の調査である。その調査内容については、正式な報告書が未刊行であったが、幸いにも同志社大学歴史資料館に残されていた「周山古墳群調査概要」や発掘調査日誌が公開され、日本考古学年報の記載、出土した埴輪の内容が整理報告された(辻川2013)。

調査は、1974年7月21日から7月28日までの8日間で、1号墳の墳丘北西裾部、西側側面と隣接する2号墳との間、墳丘東側の3箇所にトレンチを入れて調査された。ここでは、「1974年度調査の結果のまとめ」(辻川2013、p.10)と題して、その成果をまとめられた辻川氏の報告内容を引用する。

【墳形と規模】「概要原稿」では、調査結果から「1号墳の西側基底部の南北長は16.4m、現在の高さは1.7m」と結論づけた。なお、「南北16.4m×東西15.5m、高さ1.7m」の方墳とする史料2はこの調査にもとづくであろう。

【外表施設】すくなくとも墳丘西側斜面には、ほぼ全面に葺石が葺かれていた可能性がたかい。葺石は10～20cmの石材を基調とし、基底部には大型(30～50cm)の石材が根石として一列の並べられていた。葺石の石材は角礫であり、若干の河原石を併用していた。

【1号墳・2号墳間の礫敷】1号墳・2号墳間には、川原石を混えた径15～25cmの扁平礫を約2.7mの幅で地山に敷いている状況が確認された。この石敷きは、1号墳西斜面の葺石裾部より1.6m離れており、その間は平坦面をなし、礫敷の底面が浅いU字状を呈していた。

表1 周山古墳群規模等一覧表

| 番号 | 名称 | 種類 | 所在地 | 遺跡の概要 | 現状 |
|-------|--------|----|-----|---------------------------|----|
| 28-1 | 周山1号墳 | 方墳 | 下折谷 | 丘陵稜、一辺18m、高3m、葺石、埴輪、古墳中期、 | 完存 |
| 28-2 | 周山2号墳 | 方墳 | 下折谷 | 丘陵稜、一辺15m、高2.5m、中央部既掘孔 | 完存 |
| 28-3 | 周山3号墳 | 方墳 | 下折谷 | 丘陵稜、一辺10m、高1m | 完存 |
| 28-4 | 周山4号墳 | 方墳 | 下折谷 | 丘陵稜、一辺20m、高4m、中央部既掘孔 | 完存 |
| 28-5 | 周山5号墳 | 方墳 | 下折谷 | 丘陵稜、一辺109m、高1.5m | 半壊 |
| 28-6 | 周山6号墳 | 方墳 | 下折谷 | 丘陵稜、一辺10m、高1m | 半壊 |
| 28-7 | 周山7号墳 | 方墳 | 下折谷 | 丘陵稜、一辺12.5m、高1.8m、葺石 | 完存 |
| 28-8 | 周山8号墳 | 方墳 | 下折谷 | 丘陵稜、一辺15m、高1.5m | 完存 |
| 28-9 | 周山9号墳 | 方墳 | 下折谷 | 丘陵稜、一辺8m、高1m | 完存 |
| 28-10 | 周山10号墳 | 方墳 | 下折谷 | 丘陵稜、一辺11m、高1.5m | 完存 |
| 28-11 | 周山11号墳 | 方墳 | 下折谷 | 丘陵稜、一辺8m、高1m | 完存 |

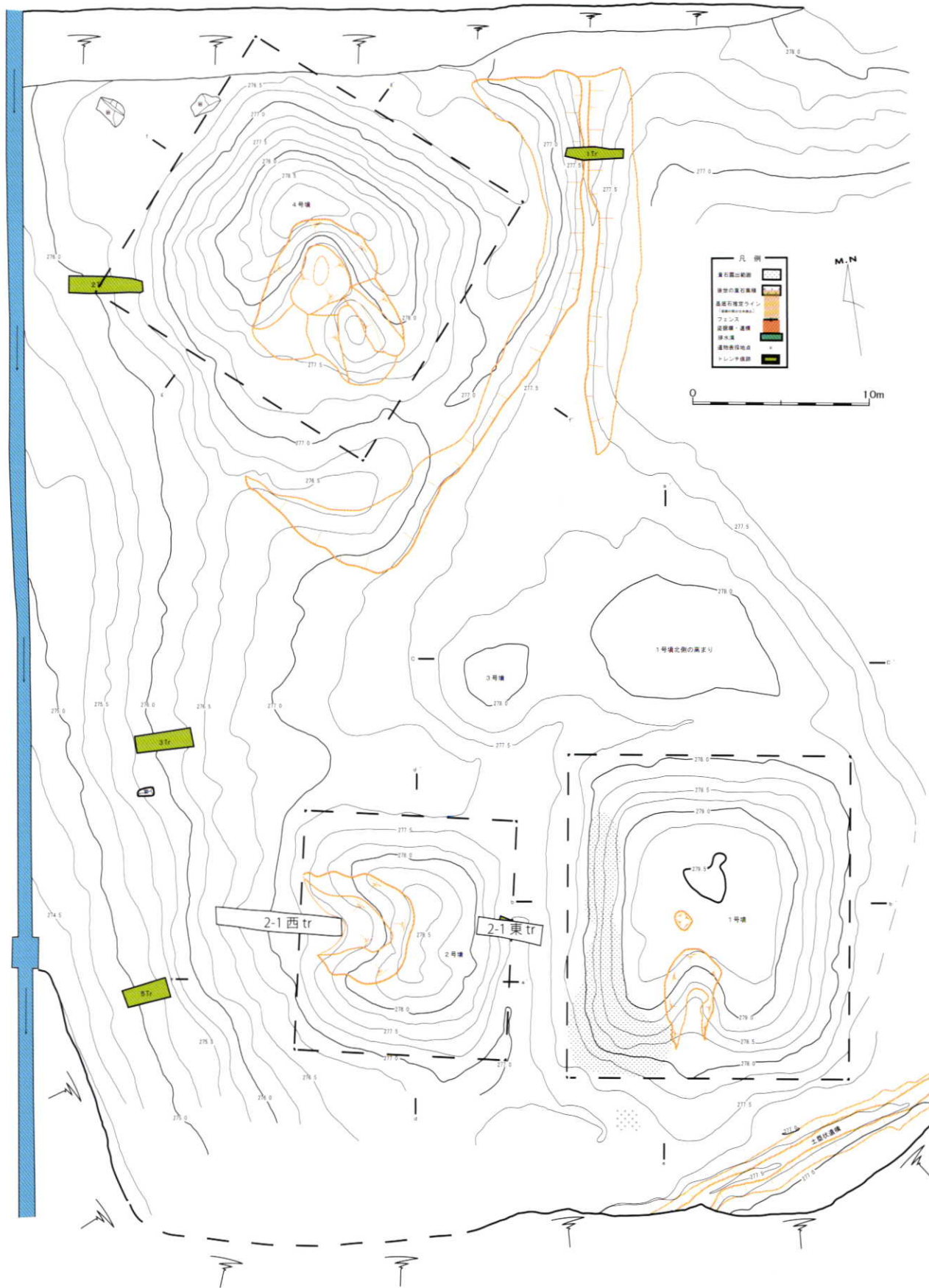


図8 周山古墳群調査区設定図

【埴輪配置】出土状況等を勘案すると、墳頂部平坦面上に少量の円筒埴輪と蓋形埴輪等が樹立されていたことが想定できた。(以上、引用)

なお、1号墳出土の埴輪は、同志社大学歴史資料館に保管されている。コンテナに1/2箱ほどで、辻川氏によって報告されている。器種は、円筒埴輪（普通形、朝顔形）、形象埴輪（蓋形、不明）で、円筒埴輪は埴輪検討会編年Ⅲ期（川西編年Ⅲ期）の中期前葉頃の年代であった。

一方、龍谷大学考古学実習室・考古学研究室が2012年度から翌年にかけて実施した周山古墳群の測量成果との対比も行われている。成果との対比では、1号墳の墳丘裾部の位置は標高277.0m付近ではなく、標高277.5mで、南北約16.5m、東西約15mに復元するのが妥当であるとの見解も出されている。

以上のように、1号墳の発掘調査成果は、古墳の年代や性格を考える上で重要な成果となる一方、2号墳との間の石敷については年代、構造など再検討すべき点を残すこととなった。

〔3〕 2～4号墳

2号墳は、1号墳と軸を概ね揃えた、南北約13.5m、東西約12m、高さ約1.5mの方墳と推測している。墳丘上には人頭大の礫が散見されるが、1号墳ほど量が多くないので、葺石が伴うか否かの判断は難しい。墳丘中央は大きく凹むが石材は見えないので、埋葬施設は木棺直葬ではないかと推測されている。墳丘東斜面は東にむけて押し流された状況で墳裾は不明瞭である。これまでに遺物を採集できていないが、1号墳の方位性から5世紀初め頃と推測している。

3号墳は、2号墳北側にある標高278mの高まりである。1号墳北側の高まりと同様に古墳か否か明確になっていない。墳丘の構築に伴って削り残された地形の可能性もある。遺物は採集していない。

4号墳は、2号墳の北37m付近にある方墳である。古墳の規模は、一辺約17m、高さ約2.5m。古墳軸は、北で東に約30度傾く。墳丘上で大礫は確認できないので葺石はないものと見られている。また、段築痕跡も見られない。

墳丘中央付近は、長さ約5m、深さ約2mの盗掘孔がある。墳丘の周囲には幅4mほどの周溝がめぐる。東側は堤状の高まりが連続するが、古墳に伴うものではなく、さらに東側の造成によって削り残されたものである可能性が高い。今回、地表面で採集した須恵器が本墳に伴うものであれば、6世紀代の可能性が指摘できる。(國下多美樹)

文献

京都府教育委員会『京都府遺跡地図』1986年。
辻川哲朗「丹波・周山1号墳出土埴輪について」『同志社大学歴史資料館報』第16号2013年。
龍谷大学文学部考古学実習室「4 2012年度周山古墳群墳丘測量調査報告」『考古学実習』2013年、No. 9、龍谷大学文学部考古学実習室「4 2013年度周山古墳群墳丘測量調査報告」『考古学実習』No.10 2014年。



図9 周山1号墳の現状（西から）



図10 周山3・4号墳の現状（南東から）

5 調査の成果

〔1〕 2-1東トレンチ

1. 基本層序 (図 11)

表土である1層を取り除くと、墳丘盛土の流出土を含む比較的しまりのよい褐色粘質土の2a層を全面に検出した。当初はしまりのよい2a層を墳丘盛土と想定したが、トレンチ東端部の石敷きの状況確認のために、断割りをいれると、その直下にはしまりが悪く植物の根が多く入る黄褐色系統のシルト～粘質土の2b層が認められ、くわえてこれらの層は後述する道路状遺構と考えられる石敷きや墳丘盛土上面を覆っていたため、近代以降の新しい時期の堆積層と認識した。

2b層を取り除くと、東端付近では道路状遺構の構築土とみられる拳大の礫を多く含む褐色粘質土の3層、西端では上面に石材が乗り墳丘盛土とみられるしまりのよい褐色粘質土の4層、中央では地山とみられる橙色粘質土の5層を検出した。3層と4層の先後関係は明らかではないが、4層が古墳の墳丘に伴うものであり、3層が道路状遺構に伴うものとみられることから、4層が古く3層が新しいものである可能性が高い。

2. 遺構と遺物 (図 12)

周山2号墳の墳丘盛土は前述した4層で、トレンチ西端上端から東へ70cm付近の地点において傾斜変換点が認められ、墳丘東端と認識した。西トレンチで検出した墳丘端とは直線距離で約13mとなる。また、墳丘端付近には長さ40cm、幅20cm以上の大型の石材があり、葺石の基底石の可能性が考えられたが、傾斜変換点よりやや上に位置し、石材下部に2b層が入り込んでいたことから、葺石ではなく後述する石敷きに伴うものの可能性が高い。

墳丘斜面は40～45°程度の角度で立ち上がっており、その表面には拳大～人頭大の礫が4石認められた。石材はいずれもチャートの垂角礫である。これらの石材については、西側トレンチで検出した石材と大きさが似通っており、葺石とみられる。ただし、いくらかの封土の流出は想定できるものの、石材は墳丘斜面にまばらにしか認められず、古墳築造当初から葺石はまばらにしか施されていなかったものとみられる。古墳に伴う遺物は認められなかった。

トレンチの東半部では3層上面において、拳大～人頭大の石材を面的に敷き詰めた石敷き遺構を検出した。同志社大学による1号墳の調査時に、1号墳と2号墳の間の平坦面に河原石が敷き詰められていることが明らかになっており、検出した石敷きはこれに相当するとみられる。石材は1号墳の斜面で表面観察できる葺石や2号墳で認められる葺石のようなチャートの角礫も一部含むものの、河原石由来の円礫も多く認められ、また円礫の平坦面がレベルを揃えたうえで上部に向けられている状態であった。

断割りをいれた個所では、石敷きの下部から裏込めとみられる拳大の礫群を検出した。同志社大学の調査時は古墳に伴う石敷きと想定されていたが、石材の種類や平坦面のレベルを揃えて上に向けて敷き詰めている状況、裏込めの在り方などから、道路状遺構である可能性が高いとみられるが、性格を確定することはできなかった。

遺物は、構築土の3層から出土せず、構築された時期は不明である。なお、石敷き遺構の上面で近世瓦片が出土しており、現状では石敷き遺構の年代は近世以降と想定する。

3. 小結

本トレンチの成果をまとめると、以下のとおりである。

周山2号墳に伴うものとしては、墳丘東端を確認したほか、墳丘斜面において葺石とみられる拳大～人頭大の石材を検出した。葺石はまばらにしか認められず、当初からまばらな施行であったとみられる。古墳に伴う遺物は出土しなかった。

トレンチの東半部では、石敷き遺構を検出した。同志社大学の調査では古墳に伴う石敷きと想定されていたが、上面で近世以降の瓦片が出土したこと、石材のいずれもが平坦面を上に向けていることから、近世以降の道路状遺構と推定したが、確定には至らなかった。

(花熊祐基)

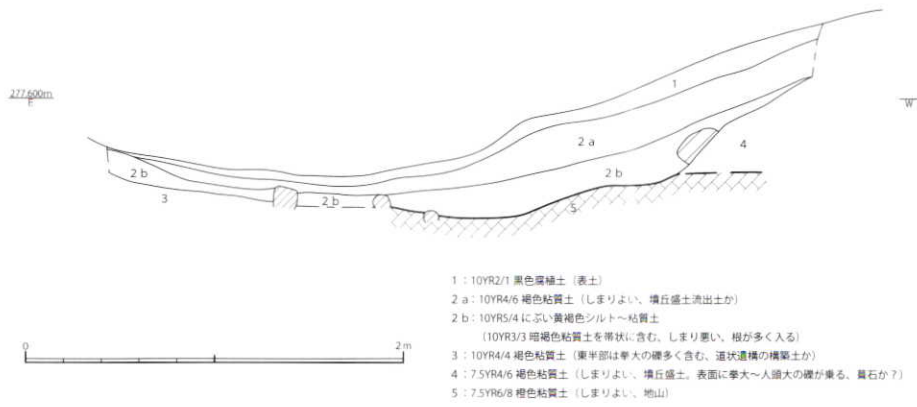


図 11 2-1 東トレンチ断面図

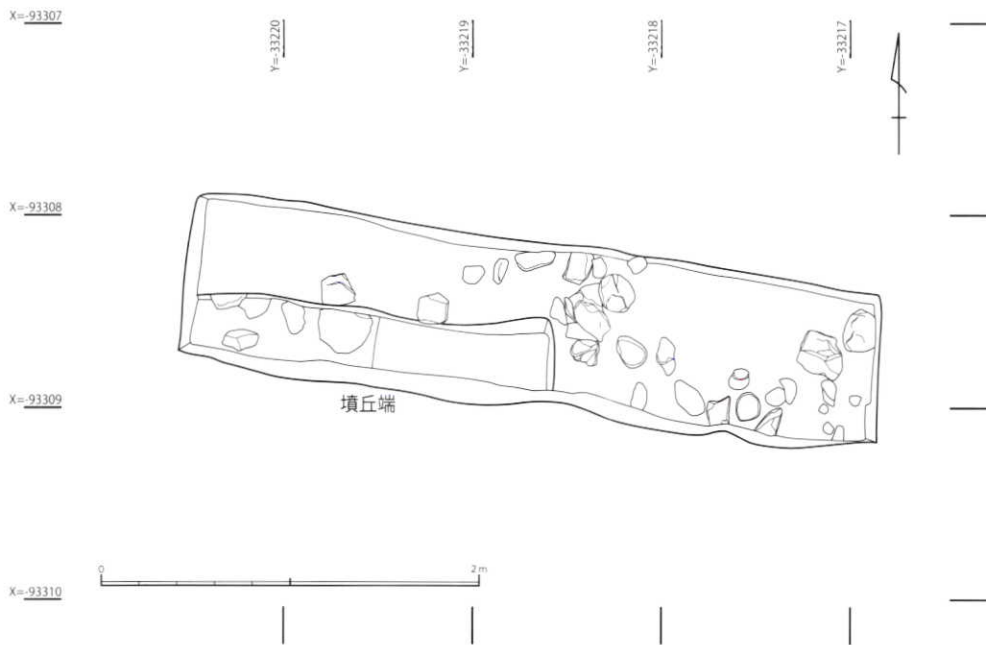


図 12 2-1 東トレンチ平面図

〔2〕 2-1 西トレンチ

墳頂から西側にかけては盗掘坑ないし土採りの痕跡と考えられる大きな凹みがあり、この凹みから墳丘西端の裾推定地付近にかけてトレンチを設けた。トレンチ規模は東西7m、南北1mとした。

1. 基本層序 (図 13)

西トレンチの基本層序は土層観察に基づいて大きく3層に区分した。

1層は木や笹の根が多く生える表土である。1層を取り除くと、西側には締りの悪い黄褐色粘質土の2a層、東側には締りのよい褐色の粘質シルト～粘土の3a層を検出した。締りの良さから、3a層が墳丘盛土である可能性を考え、北壁側を幅約30～40cm、深さ約40～70cmまで試掘した。その結果、3a層の直下にオリブ褐色、黄褐色のブロックや5～30mm大の礫を少量含む、にぶい褐色の粘質シルト～粘土の3b層、この3b層の直下に褐色の粘土の3c層を検出した。

2a層の直下には、礫を含む灰黄褐色の粘質土の2b層、上層に50～200mm大のチャートを多量、砂礫を少量含む暗褐色の粘土の2c層を検出した。3層は締りがよいが、2層は締りが悪く、傾斜変換点も確認できたため、3層は墳丘盛土、2層は墳丘構築後に流出した二次堆積と考えられる。また、2c層に堆積した多量の礫に関しては、現段階では流れ落ちた葦石が堆積したものと想定しているが、墳丘前面を覆うほどの量はないので確定することは難しい。

2. 遺構と遺物 (図 14)

西トレンチでは、周山2号墳の墳丘盛土を前述した3層とし、トレンチ西端から東約2m地点において傾斜変換点認められた。傾斜は40～45°程度で立ち上がり、東トレンチで確認された墳丘斜面の角度ともおよそ一致する。墳丘盛土は、土層観察の結果、3c層、3b層、3a層の順に、10～20cm程度の厚さで積み上げて構築したことが推測される。

墳丘端付近で検出した多量の礫は、検出した位置や出土状況から、前述した通り、葦石として使用されていた礫が流れ落ちたものと考えられるが、全面を葦き上げる量はない。礫は拳大～人頭大の基盤起源の垂角礫が中心であるが、中には円礫や縄文時代の磨凹み石も認められたため、河床から搬入された可能性が考えられる。

今回の調査では、礫群の中に磨凹み石が混入していたものの、古墳に伴う遺物は確認できなかった。

(前田詞子)

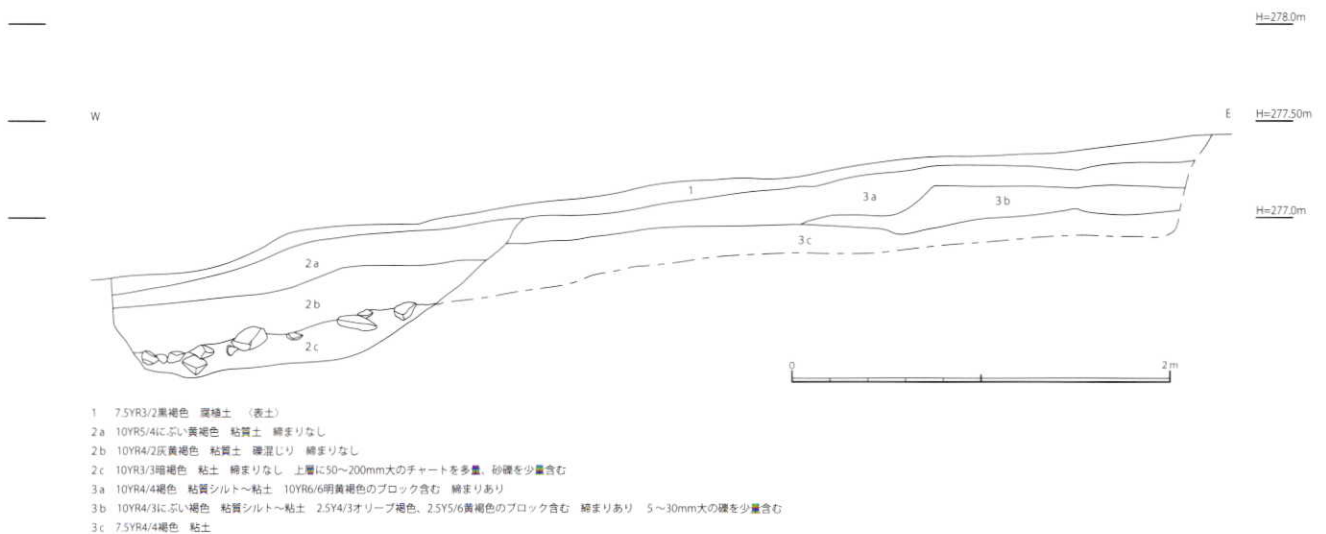


図 13 2-1 西トレンチ平面図・断面図

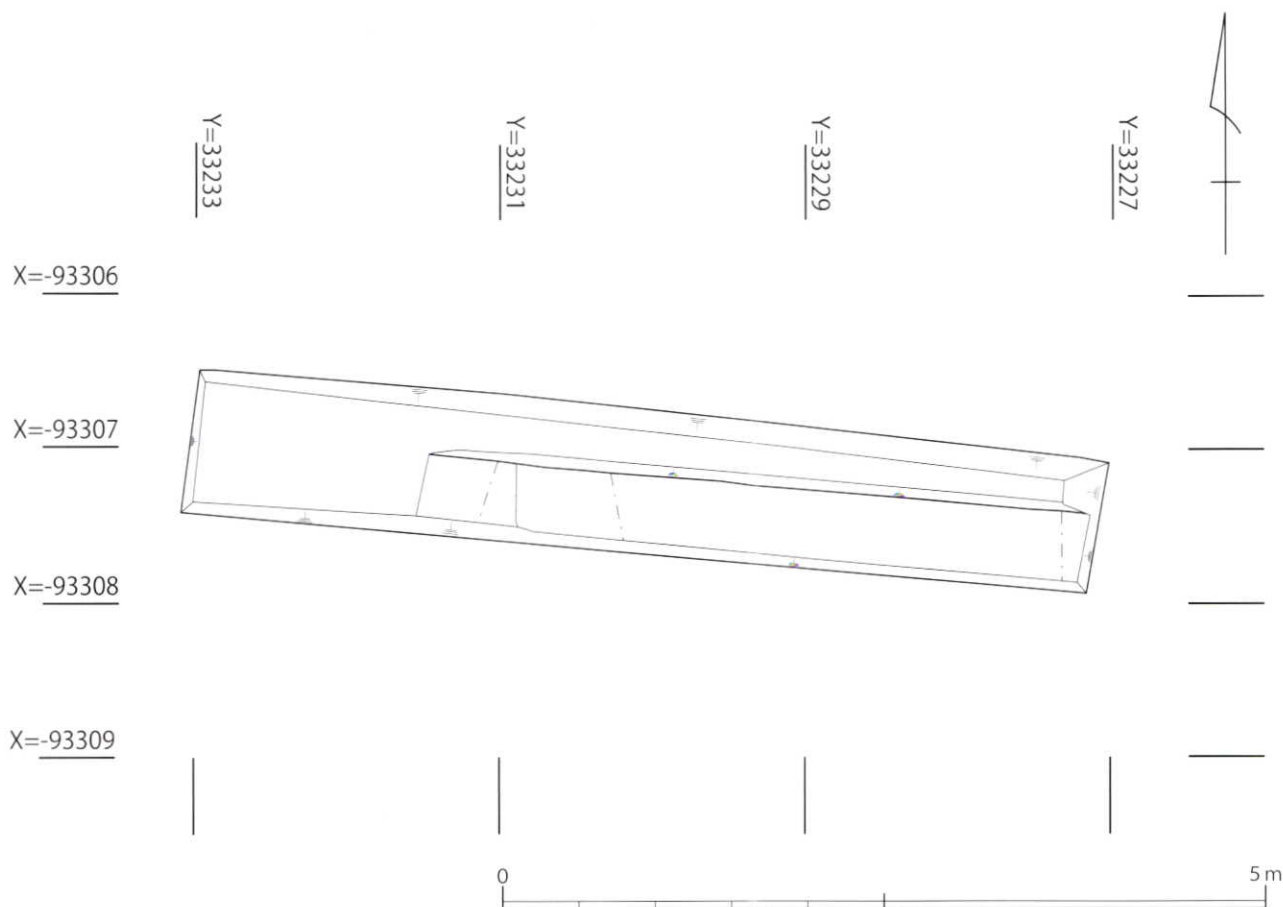


図 14 2-1 西トレンチ平面図

〔3〕 出土遺物 (図 15)

今回の調査では、縄文時代、近世の遺物が少量出土した。ここでは 4 号墳で採集した遺物についても報告する。

磨凹み石 (1) 周山 2 号墳、2-1 西トレンチ西端の第 2 層下位から出土した。河床礫の砂岩を利用するもの。平面楕円形を呈する。上端を欠損する。a・b 面は敲打痕・磨り痕跡、b・c 面に叩きによる凹痕、d 面にも敲打痕が残る。長軸 13.7cm、短軸 11.1cm、厚さ 7.5cm、重さ 1.630g。縄文時代の所産であろう。

須恵器・甕 (2) 周山 4 号墳墳丘上で採集されたもの。体部片である。外面は平行タタキ (3 条/cm)、内面は同心円当て具痕を残す。外面の一部に、にぶい黄橙色 (10YR6/3) の自然釉が付着する。胎土は、緻密で 0.5mm 大の長石を含む。硬質焼成。色調は、内面灰色 (N5/0)、外面灰色 (6/0)、断面にぶい赤褐色 (5YR5/3) である。

平瓦 (3) 周山 2 号墳、2-1 東トレンチ第 1 層から出土した。側辺を残す断片である。凸凹面ともにナデ調整、側面は削り調整。厚さ 1.2cm。胎土は緻密で黒色粒を少量含む。硬質焼成。表面・断面灰褐色 (10YR6/2) を呈する。近世の所産であろう。 (池浦里咲)

6 まとめ

周山古墳群の発掘調査は、1971 年の同志社大学考古学研究室による 1 号墳の調査以来、半世紀ぶりとなった。5 年間の調査計画の初年度となった 2022 年度は、2 号墳の墳丘調査に着手した年度である。その成果と課題について述べてまとめとしたい。

① 墳形、規模の確認

墳形の確定は今後の調査に委ねられるが、方墳であることを追認する状況であった。規模は、古墳主軸に沿った東

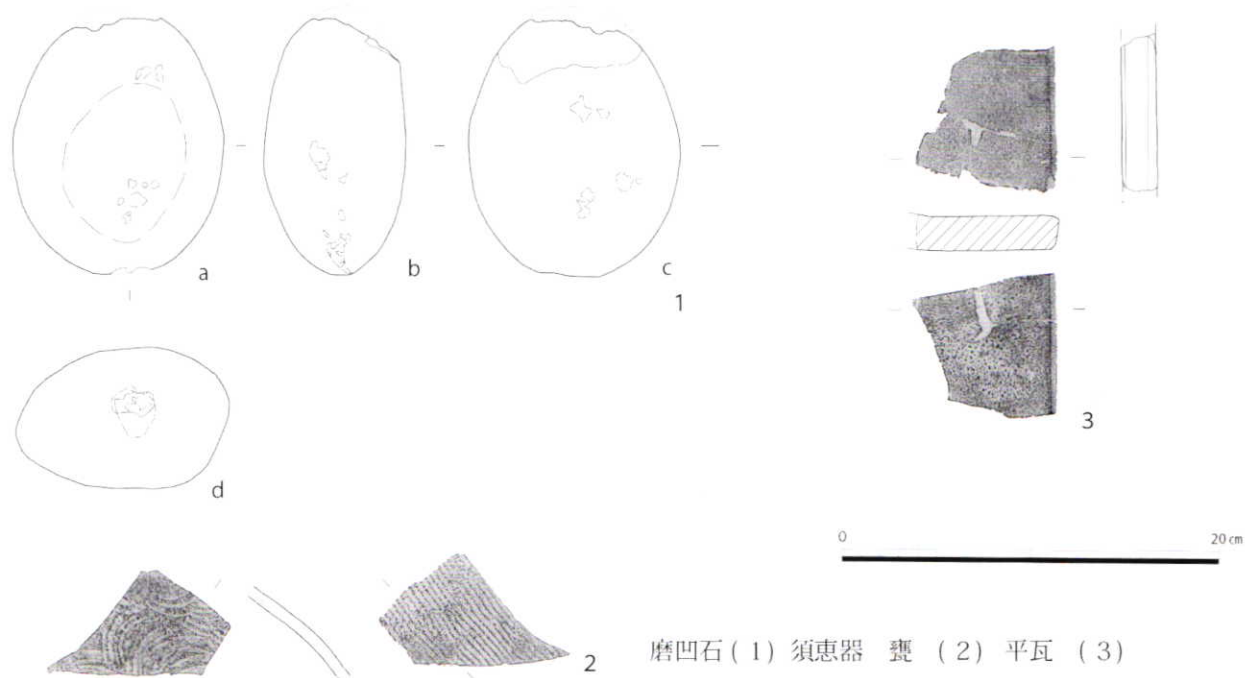


図 15 遺物実測図

西向きの特レンチでそれぞれ墳丘端を検出し、東西長が 13 m であることが明らかになった。測量調査時は東西長を 12 m と想定していたので、1 m 程度大きくなったことになる。基底石の検出や南北長の情報を得ることが課題となる。

② 葺石、埴輪等の外表施設の有無の確認

葺石は、東側斜面上で葺石とみられる大型石材が確認された。また西側特レンチの西端では墳丘削平時に掻き出された葺石とみられる石材が集積していたことから、施されていた可能性が極めて高いものと推測される。もっとも、出土量は少ないので、墳丘全面にまばらに施工されていたのであろう。葺石は段丘起源の垂角礫と河床礫が使用されていることは、1号墳と類似する組成として注意される。埴輪は一切確認されなかった。2号墳の埴輪から1号墳との間において、1971年の調査で確認されていた石敷き遺構を検出した。礫面は平坦面を上に向けて配置されているから、いわゆる礫敷とみて良い。検出した礫間には1層系土で下位に拳大の礫で構成される裏こめ礫が確認された。問題は礫敷の構築年代と性格である。遺物を伴わないが、基質の層相から近世の所産と見られたが確定するには至らなかった。道路遺構という性格も評価も含め、次年度への課題となった。

③ 埋葬施設の残存状況の確認

今回は調査できなかったので、次年度以降、状況のみを取り組みたい。

④ 築造時期に関わる資料の入手

古墳に伴う出土遺物がないので築造年代についても今後の課題となる。

以上、今回の調査は、決して大きな成果ではなかったけれども、次年度以降の本格的な調査のための基本情報や検討すべき課題を具体化できた。

周山古墳群は、京北の古墳時代を解明するための貴重な文化遺産である。その歴史的価値を明確にするための調査を継続し、学術的成果の分析と公表を重ねたい。折しも、今年度は、京北地域の出土文化財を中心とした展示、公開する施設として、京都市京北文化遺産センターがオープンした。今後は、このセンターとも連携しながら、市民への遺跡情報の公表と様々な文化遺産との融合を図る活用に向けて努力していきたいと考えている。

最後に、調査にご協力いただいた関係各位に感謝申し上げる次第である。

(國下多美樹)



(1) 周山1～4号墳の現状（中央の杉木立、ドローン撮影、南西から）



(2) 周山2号墳調査前風景（草刈り後、東側の1号墳墳丘から）



周山2号墳、2-1東トレンチ全景（2層上面、フェンス奥が1号墳、西から）



(1) 周山2号墳、2-1東トレンチ全景(2層上面、北西から)



(2) 周山2号墳、2-1東トレンチ全景(南端試掘後、西から)



周山2号墳、2-1東トレンチ全景（南端試掘後、東から、試掘孔奥：墳丘側の葺石、手前は石敷き）



(1) 周山2号墳、2-1号墳試掘断面（北から、墳丘側）



(2) 周山2号墳、2-1号墳試掘断面（北から、礎敷部分側）



(2) 周山2号墳、2-1西トレンチ全景(西から)



(1) 2号墳、2-1西トレンチ全景(2層上面、西から)



(2) 2号墳、2-1西トレンチ全景(最終面、直上、ドローン撮影)

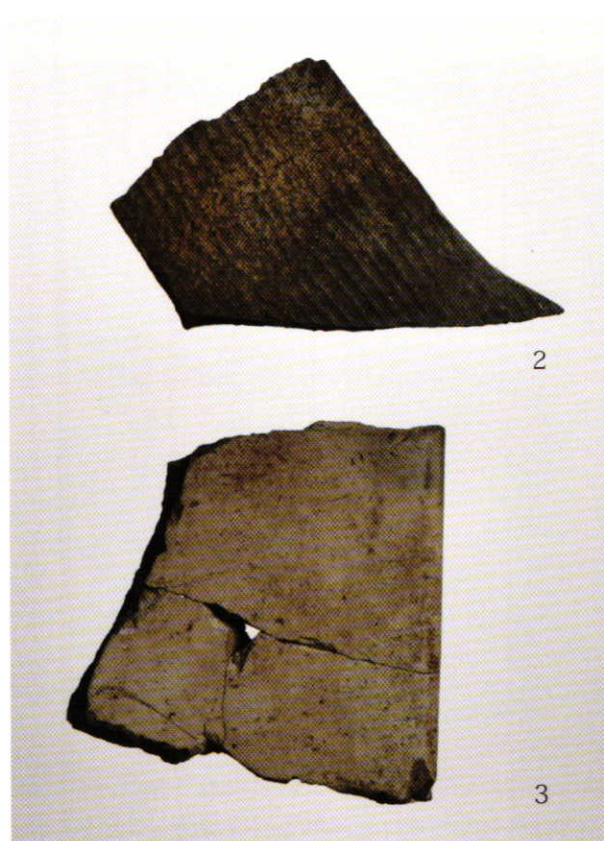


(1) 周山2号墳、2-1西トレンチ西端2c層中の礫群(南西から)



1 a

1 c



2

3

(2) 出土遺物 磨凹石(1) 須恵器(2) 平瓦(3)

発掘調査抄録

| | | | | | | | |
|---------------------|---|--------|---------------|------------------------------|--|------------------------------|------|
| ふりがな | しゅうざんにごうふんはっくつちようさほうこくしよ | | | | | | |
| 書名 | 周山2号墳発掘調査報告書 | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 龍谷大学文学部考古学実習調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第2冊 | | | | | | |
| 編著者名 | 國下多美樹・木許守(編集)、花熊祐基・前田詞子・廣澤公紀・池浦里咲 | | | | | | |
| 編集機関 | 龍谷大学文学部考古学実習室 | | | | | | |
| 所在地 | 〒600-8268 京都府京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1 | | | | | | |
| 発行年月日 | 2023年3月17日 | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | °' " | °' " | | |
| しゅうざんにごうふん 周山2号墳 | きょうとし うきょうく けいほくしも ちようおりたに 京都市右京区 京北下町折谷 地内 | 261008 | C1906 2033 | 35°9'30" | 135°38'7" | 2022年 8月17日 ～8月28 日 | 9㎡ |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 周山2号墳 | 古墳 | 古墳時代中期 | 葺石、墳丘盛土 | 縄文時代：石製品 古墳時代：須恵器 近世：瓦 | 1971年の同志社大学による1号墳の調査以来、51年ぶりの発掘調査。2号墳の規模、構造、年代を知るための学術調査である。 2号墳の東西幅は、13mであることが明らかになった。 | | |

周山2号墳発掘調査報告書

龍谷大学文学部考古学実習調査報告書第2冊

2023年3月17日 発行

編集・発行 龍谷大学文学部考古学実習室
〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1

印刷・製本 三星商事印刷株式会社
〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273